



TITLE:

大学教育評価をどうするか：評価からFDへ(<第8回大学教育改革フォーラム>挨拶)

AUTHOR(S):

長尾, 眞

---

CITATION:

長尾, 眞. 大学教育評価をどうするか：評価からFDへ(<第8回大学教育改革フォーラム>挨拶). 京都大学高等教育研究 2002, 8: 190-191

ISSUE DATE:

2002-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54101>

RIGHT:

## 挨拶

長 尾 真(京都大学総長)

皆さん、こんにちは。たくさんの方々においでいただきまして、本当にありがとうございます。高等教育教授システム開発センターの改革フォーラムは、第8回となりました。今まで着実に議論を重ねてきました結果、今日、午前中に研究会をここでやっていただき、そして午後に評価の問題を扱うということで、全国からこんなにたくさんおいでいただくことになりました。本当にありがとうございます。

この高等教育教授システム開発センターというのは、京都大学で数年前につくりましてから、大学における授業のあり方ということについて、実証的な立場からいろいろな研究をしてきたわけです。これから、大学改革、あるいは大学の転換期にあたり教育の問題をどのように把握し、また我々教員が努力していくかということが、ますます模索されていきます。この中で、この研究センターのやるべきこと、あるいは研究成果を皆さん方に還元していくことの大切さが、日に日に高まってきているものと存じます。

フォーラムのテーマである大学教育評価ですが、今日、いくつかの新聞に載っているのをご覧になったかと思います。大学評価・学位授与機構が、国立大学の大学運営全般に関して評価をいたしました。それから、理学系、医学系の両方の教育に関する専門分野の評価をしました。その結果の公表があったわけです。昨日午後3時から、東京で公表結果がオープンにされまして、今朝の新聞にいくつか載っているわけです。いよいよ国立大学の教育、研究、それから大学全般の運営のしかたなどにつきまして、第三者評価という形で外部の方々の評価が真剣に取り上げられることになったわけです。

この評価の結果は、膨大な資料で、これぐらいのものになっているわけですが、これをつぶさに読み、研究することは大変時間のかかることでして、なかなか簡単ではありませんし、その結果をどのように受けとめるかということにつきまして、やはり相当な時間をかけてよく考える必要があるかと思っております。

ただ、大学評価・学位授与機構の評価をされた当事者の方々自身におかれましては、初めてのことでありますので、考えていなかったような経験、場合に会っております。これから、いろいろなかたちで改革、改良を実施しながら、なるべくよい教育評価あるいは研究評価、大学評価をやっていただくことになるのではないかと思います。したがって、こういう評価につきましては、いろいろな方々がいろいろなご意見を出していただくことは大変結構なことだと考えられます。

しかしながら、一方では、評価というものが何のために行われるかということをお互いにわきまえる必要があるわけです。評価する側もそういう立場です。そういう立場というのは、大学を少しでもよくしていくとか、大学の教育・研究をどのようにしたら活性化していくことができるかということをお考えながら評価をするということです。評価される側も、評価する方々のおっしゃることを率直に受けとめて、自分たちが反省し、改革に努力をしていくことが必要なので、相互の信頼関係を十分に打ち立てていかなければならないのではないかと思います。

今日、おみえになっている方々は、ほとんどが国立大学ではないか、あるいは少なくとも国立大学の方々もある程度の数はいらっしゃるかと思います。国立大学はちょうど2年先には法人化されることになりました。そうしますと、この評価というものが、現在のような評価から少し質の変わった、性質の変わった評価になっていくと想像されております。といいますのは、現在の大学評価・学位授与機構がやっております評価は、純粋に大学のあり様について、外部から見てどうであるかというコメント、評価をするのです。それに対して、法人化されたあとの国立大学に対する評価といいますのは、その評価に基づいて国から支給される運営交付金というものが上下されるのです。頑張っている評価を得たところはお金がたくさんもらえるし、さぼっているところはお金が少ないということになることは明らかです。そういう方針であるようです。

そういうことになりますので、評価のしかたも少し変わるべく、大学評価・学位授与機構の方ではおそらく評価内容であるとか、いろいろなことを少し変えて進まれるものと想像しております。そうなりまして、やはりお互いの

信頼関係は必要です。我々日本人の場合は今まで評価というようなことを一度も受けてこなかったのです。あるいは、評価というのは、日本人の体質になじまないような面もないわけではありません。そういう意味で、ここで外部の方々の評価を受けるということは、とても新しい世界が出現してくるということでもあります。お互いに身構えたりして、少し雰囲気が悪くなるというようなことがあったら、まずいわけです。

評価の結果、運営交付金の支給額が上下いろいろ変えられるということになりますと、大学相互間で競争がかなり厳しく起こってくることはまちがいないわけです。もちろん、お互いに切磋琢磨をするために評価をするという面もあります。切磋琢磨、競争というのは大変必要なわけですが、この競争が変なカタチで行われたり、過度に行われるということになりますと、いろいろなひずみが出てくる可能性があるわけです。

現在の産業界の企業などの生き残り作戦、競争というようなものを見ておきますと、新聞紙上でもいろいろなことが書かれておりますように、倫理基準とか、経営者倫理とかいったものがめちゃくちゃになっている面もあるわけです。そういったことが過度な競争、生き残りというような言葉でますます激しくなるのは、非常に嘆かわしいことです。

そういったことが高等教育の世界に持ち込まれるとか、高等教育の世界でもそういうことが起こるとするならば大変なことです。そういうことがないように、評価する側も、評価される側も、もっと大らかにこれをするようにしなければいけないのではないかと思います。私はこれは大変大事なことだと思っています。教員側と大学側の教育・研究に関する倫理の問題があります。国や評価する側においても、そういうことを十分に考慮したうえでやるということです。そういうことでなければ、何のために評価をやっているのかわからないということが起こってくるわけです。

今日はこのあと、いろいろな問題提起、あるいは皆さん方との間で議論が行われるということになりまして、大きな実りのあるフォーラムになるのではないかと期待しているわけです。あまりにも過度で、極端なカタチでのやり方とか、ものの考え方ということではなくて、お互いに日本の高等教育がよくなるためにやっているのだという中心的なスタンスを見失わないようにして、頑張っていきたいものだと思っているしだいです。

いずれにしても、非常にたくさんの皆さん方においでいただきました。これから熱心な議論が展開されることを期待いたしまして、私のオープニングにおきますご挨拶にさせていただきます。(拍手)。